

大使コラム（2011 年 10 月）

10月、このところリスボンでは爽やかな晴天の日々の合間に、まだ残暑の厳しい日も見られます。観光客も一時に比べ随分少なくなりました。

本日（1日）、リスボン市内のベレン地区にある「日本公園」で「ジャパン・フェスタ」を開催しました。幸い好天に恵まれ、昼の開会式から夜まで続いた日本関連の行事はとても盛況でした。詳細は大使館のHPなどで報告しますが、地元の方々だけでなく観光客も含め予想以上に多くの皆様に日本文化を楽しんでいただけたかと存じます。共催の「リスボン市」及び「ポ・日友好協会」と共に、行事の実現に尽力下さった方々に対し、心から御礼申し上げます。

この「日本公園」は、種子島にポルトガル人が訪れてから460周年を記念して2004年に作られました。相当数の桜の苗木も植えられましたが、その後、残念なことに木は枯れてしまい、2008年に改めて150本以上の植樹が行われました。翌年から少しずつ花が付き、今年の春に改めてこの「日本公園」の開会式を「ジャパン・フェスタ」として行う予定でした。しかし、東日本大震災が起こったため延期となり、本日の開催になったものです。

このベレン地区は、かつてポルトガルの大航海時代、新天地への船出の港でした。ここから出航した船乗り達によって我が国と西洋世界との交流が始まった、日本にとっても歴史的意味の大きい場所です。将来は毎年春に、この地を日本の桜で飾り、リスボンの新名所にしようと、これまで日・ポ双方から多くの方々が尽力されてきました。桜の開花も来年はさらに増えるでしょう。今回の参加者からは、来年は桜の花の下で、日本の祭りを行いたいとの声も多く聞かれました。夢の実現に、大使館も皆様と共に取り組んでいきたいと思えます。

先月の文化事業として、東京のモダン・バレエ団「マドモアゼル・シネマ」が当地で公演を行いました。若い女性のバレエ団ですが、普段は昼間の仕事のあと都内の練習場で鍛練を積み、今回は文化庁の支援を受けてポルトガルに来られました。公演の前日に皆さんとお会いした時は普通のお嬢さんたちのように見えた方々が、舞台では全身で表現するこの芸術の躍動感に圧倒され、息を呑むような感動を覚えました。先般の「なでしこジャパン」の快挙も思い起こされ、日本の若い女性の活躍をととても嬉しく感じました。

また先月は、地方を訪れる機会がいくつかありました。

EUでは、毎年加盟国のいずれかの都市を「欧州文化首都」に指名し、一年間にわたり様々な芸術文化の行事を行っています。日本からも「EU・ジャパンフェスト日本

委員会」などが1993年以来、日本の企業などの協力を得て多くの文化使節を派遣しています。来年は、当国の北西部にあるギマランイス市がこれに指名されました。今回は同「委員会」の方とともに、来年の派遣の打ち合わせをしてきました。

ここは人口約16万の小都市ですが、ポルトガル王国の初代国王生誕(12世紀初め)の地で、中世の歴史的建造物も多く、世界遺産(文化)に登録された美しい街です。また、ポルトガルの地方都市の中でも工業が発達した都市の一つです。この機会に、市長の計らいで主要産業の織物(LAMEIRINHO社)、靴(KYAIA社)、金属食器(HERDMAR社)を視察してきました。工場では、製品向上への各社の努力がそれぞれ印象的でした。また、製造機械がほとんどドイツ製か日本製であったのも忘れられません。消費財だけでなく、生産財(製造機械)に優位性を持つことは国民経済の底力を示すもので、競争力強化を目指すこの国の経済を考える上でも大事な問題のように思われました。

また、徳島市の経済同友会の視察団の方々と、同市の姉妹都市であるレイリア市を訪問しました。以前から日本の経済関係者の来訪を希望していたレイリア市長の意向もふまえ、視察団の方をお願いして同市訪問を日程に入れていただき、徳島市の原市長の親書もご持参下さいました。限られた時間でしたが、市長自らの案内で市内とワイン工場も視察しました。姉妹都市の間の経済交流の面で、今後何らか効果が生まれるきっかけになればと願う次第です。

さらに、リスボン近郊のヴィラ・フランカ・デ・シーラ市長を訪問しました。これは、日本のカゴメ(株)が筆頭株主となっている同市のトマト・ペースト製造企業(HIT社)の工場を視察した際、その市長も訪問したものです。工場では、トマトが成熟する夏の期間に大量の加工を一気に行う作業を大変興味深く見させていただきました。ちなみに同社はポルトガルのトマト加工の約3割を担っており、業界第2位の位置を占めています。市長とは、日本企業が地元にある縁を生かして、まずは日本の文化紹介事業などを検討してみようとの話をしました。大使館では、このような形も含め、日本企業が地元との関係を深める上でもお役に立てれば幸いと考えています。

また、当国北部のポルト市からドウロ川を西に遡りピニャオンという小さな港町まで、100キロ以上を船でほぼ一日かけて行く機会がありました。途中、この川の水面の高低差を乗り切るための閘門(こうもん)式ダムを3回通ります。このドウロ川の上流地域は、当国の主要輸出品であったポルト・ワインの原料ブドウを産する地区で、かつてはこの国の経済を支えてきたところです。ブドウ畑は、兩岸にそそり立つ斜面に長い年月をかけ整備されています。世界遺産(文化)にも登録されたこの地区の景観は一見に値すると、当地着任以来多くの方から勧められていました。実際、船の甲板から天空に達するような段々畑を見上げると、乾燥した空気の中に、ブドウ畑の緑と深い青空とのコントラストが美しく、絵画の世界にいる錯覚を覚えました。9

月はブドウの収穫時期で、普段は陸上で収穫作業やブドウ満載のトラックが行き交っているはずですが、週末のため人影も少なく、よけい不思議な光景に見えたのかもし
れません。

今月30日には、当国でも夏時間が終了します。

時節柄、皆様にはご自愛のほどをお祈り申し上げます。